

# 海外からのオンライン受講生による 調査発表活動の実践報告

Practical report of survey presentation activities by  
online students from overseas

高山幸巳・原彩子

## 要旨

本稿では、コロナ禍による入国制限で、海外からオンラインで受講している別科日本語専修課程の学生3名（2020年9月入学の1名と2021年4月入学の2名）の調査発表活動について報告する。報告では、まず、実践の背景、活動の目的と意義、実施内容を詳述する。次に、学生達へのアンケート結果を分析し、考察する。また、最後に授業記録などから、対面指導とは異なる環境での指導の可能性や問題点について分析・考察し、オンラインによる調査発表活動の意義と課題について言及する。

キーワード：留学生、日本語教育、中級前期、オンライン、調査発表活動、主体的学習、日本語運用能力

## 1. 実践の背景

城西大学別科日本語専修課程は、ディプロマポリシーの中に、「日本の高等教育を受けるために必要な日本語運用能力の習得」と「高等教育機関において主体的に学習を進める能力の習得」を掲げている。そのため、1年の学習期間の前期後期ともに、学生の日本語レベルに合った総合的な日本語の教科書を選定し、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能をバランス良く伸ばす教育を行った後、一定の基礎力がついた後期の数週間を学生達が主体的に学習を進める調査発表活動に充てている。

本課程における調査発表活動とは、学生ひとりひとりが、自分自身に関わりの深いひとつのテーマについて自ら知りたいと思うことを調査し、その結果を発表資料（パワーポイント）にまとめ、担当教員や招待した試聴客の前でプレゼンテーションをする活動である。尚、発表内容およびプロセスの努力は1年間の日本語学習の集大成として成績評価の対象にしている。

このような活動は、他大学の日本語クラスや様々な日本語教育機関でも、しばしばプロジェクトワーク<sup>1</sup>として実践され、その効果や意義が報告されている<sup>2</sup>。また、実践

方法を詳しく解説している教材<sup>3</sup>も複数存在する。しかし、これらは全て対面での実施を前提としたものであり、課程の全てをオンラインで実施し、このような活動を行ったという報告は管見の限りまだない。

本課程は、通常、日本語レベルの異なる4月入学と9月入学で教室を分け、月曜から金曜までの毎日、1コマ90分1日3コマの対面授業を実施している。学習環境としては、教室、教員室、事務室がすべて同じフロアにあるため、他クラスや日本文化専修課程の学生達、教職員とはいつでも気軽に交流ができ、キャンパス内の図書館、コンピュータールームなども自由に利用することができる。しかし、2020年9月入学の学生より、コロナ禍による入国制限のため、全員が母国自宅からのオンライン受講を強いられ、相互の柔軟な交流も教育施設の利用もできない環境に置かれた。また、大学の感染症対策によって授業時間も1コマ80分に短縮された。

現在はインターネット上の様々なツールを利用し、自然な日本語に触れることが可能な時代ではあるが、身の回りに日本語が溢れ、日常的に運用できる留学生活とは大きく異なる環境下でオンライン授業だけでは、語彙力、聴解力、口頭表現力を伸ばす活動がしにくく、学生達は受動的な立場になりやすいため、例年の学生達に比べて運用力が伸び悩んでいることが問題であった。そこで、通常であれば、4月入学9月入学ともに、後期授業を終了する直前の学生のみが対象となる調査発表活動に、今回は、入学後まだ4ヶ月足らずの2021年4月入学の学生2名も加え、日本語運用力の向上を目指すことにした。尚、3名の学生は日本語レベルに多少の差は認められたが、学習段階はほぼ同等（中級前期）であった。

### 1-1. 本調査発表活動の目的と意義

本調査発表活動では、学生の日本語レベルと本課程のディプロマポリシーを鑑み、以下5つの日本語運用能力の習得を目的とした。

- (1) 日本語を介して行う調査と発表までの計画力
- (2) 日本語で書かれた資料からの情報収集力および分析力
- (3) 日本語による発表資料の作成力

---

1 田中・斎藤 (1993) は、プロジェクトワークを「ある外国語を学習するときに、クラスまたは学習者のグループでなにかのプロジェクトを設定し、それを遂行していく過程でその外国語を多量に使用しながら学習していく活動」と定義している。

2 飯田・藤沢 (2017)、福池 (2018)、山田 (2012) 他

3 『改訂版 トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ中級前期』スリーエーネットワーク、『アカデミックプレゼンテーション入門』ひつじ書房、『情報と知識の海－現代を航海するための知のナビゲーター』くろしお出版、『プラクティカル・プレゼンテーション 改訂版』くろしお出版 他

- (4) わかりやすい日本語で伝えるための口頭表現力
- (5) 日本語による質問への対応力

(1) は、限られた期間の中で、日本語を介して行う調査と発表までの計画力を身につけることが目的である。シラバスの関係上、活動開始日から終了日までの大まかなスケジュールは教員側で用意したが、その中で各課題を、どのように処理していくかを予め計画し、効率よく作業を進めるための手順を考え、発表を完遂するための計画力である。

(2) は、ふりがなが振られているなど留学生向けに書かれた教科書や資料から離れ、一般向けに書かれた日本語の資料から自分に必要な情報を収集し、内容を理解し分析する力を養うことが目的である。本活動では、学生自身の希望進路先（大学学部・大学院研究科）について調査することを課題とした。ホームページなどに書かれた日本語をgoogle 翻訳などで母語に翻訳して理解することも含め、必要な情報を収集し、理解するためのリテラシーの獲得を目的とした。これは、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能のうちの特に「読む」能力を駆使した実践活動となる。

(3) は、集めた資料から重要な部分を抽出し、他者に向けてわかりやすく説明するための発表資料の作成力を養うことが目的である。近年の学生は、母国の高校や大学で、既にプレゼンテーションの経験があり、グラフやパワーポイントの作成技術は、教員より長けた者もいるが、日本語での入力技術、ことばのまとめ方などには課題が多い。また、発表原稿の執筆は、4技能のうちの「書く」能力を大いに鍛えるものである。

(4) は、発表内容をわかりやすい表現と適切な音声で伝える力を養うことが目的である。パワーポイントを自分で操作しながら、聞き手を意識し、発音、スピード、ポーズなどに注意しつつわかりやすく説明する練習によって、4技能の「話す」能力を磨く。

(5) は、日本語母語話者、非母語話者も含め、担当教員以外の視聴客からの日本語による質問への対応力を養成することが目的である。これには、「聞く」能力と「話す」能力に加え瞬発力も必要であり、3人の学生にとっては最も難しい課題である。入学以来、オンライン授業を担当する教員以外の日本語母語話者と直接対話をする機会はほとんどなく、日常的に日本語が聞こえてくる環境で生活した経験もないため、発表までの練習だけで、日ごろ接触のない視聴客からの質問に回答するのはかなり勇気のいる挑戦である。

しかし、上記5つの目的を達成することは、本課程のディプロマポリシーに掲げた「日本の高等教育を受けるために必要な日本語運用能力の習得」と「高等教育機関において主体的に学習を進める能力の習得」に繋がり、高等教育を受けるための訓練として大いに意義のある活動である。

## 2. 調査発表活動の実施内容

### 2-1. 対象者

城西大学別科日本語専修課程に在籍する3名の学生を対象に実施した。活動開始時点での日本語レベルは、中級前期（日本語能力試験 N3 相当レベル）で、総合的な日本語の教科書『中級を学ぼう 日本語の文型と表現 56 中級前期』全8課の6課までを修了した段階であった。これ以外にも、「読解」、「聴解」、「口頭表現」、「日本事情」、「英語」の独立授業を受講しており、「口頭表現」の授業では、身近なテーマについて小さな発表をする練習も行っていった。

また、「1. 実践の背景」で述べたように、対象者は全員コロナ禍の出国制限により入学できず、入学時から2021年7月の学期末に至るまで全ての授業をオンラインで受講し、発表当日も各国からオンラインで参加した。

【表1】発表日時時点での学生のプロフィール

	国籍	入学時期	本学別科における日本語学習期間	日本語レベル
1	中国	2020年9月	約10ヶ月	中級前期上位
2	中国	2021年4月	約4ヶ月	中級前期下位
3	ベトナム	2021年4月	約4ヶ月	中級前期下位

### 2-2. 発表テーマ

発表テーマは「私の将来の計画（進路について）」である。これは、教員が選定したテーマである。主体的に学習を進める能力の習得を目指すのであれば、テーマの選定も学生自身が行うのが望ましいが、本課程における過去の調査発表活動を振り返ると、初めてこの活動に取り組む学生にテーマの選定を委ねると、決定までに非常に時間がかかったり、安易に選んで始めたところ、途中で行き詰まり、活動期間の後半で突然テーマを変えて苦労したという例もあった。更に、この時期の学生にとって最も差し迫った問題として、希望進路の決定と受験準備の開始があったが、来日していない学生達にはその実感が薄く、オンラインでの進路指導が思うように進まないという事情もあった。そのため、テーマの自由選定は次学期後半の2度目の調査発表活動で行うこととし、本学期は、教員が選定したテーマで実施することにした。

## 2-3. 活動方法

### 2-3-1. 実施期間と実践の流れ

準備期間を含む実施期間は2021年7月5日から22日までで、1回80分の授業全20回分である。そのうち1回目は調査発表活動についての説明を行い、2回目から19回目までは発表のための調査準備期間とし、最後の20回目を発表日とした。準備期間中の指導や助言については、リレー形式で授業を担当した教員（計5名）がzoomと大学が推奨するOffice365のOneDriveを使って行い、発表もzoomで実施した。発表時間は、1人15～20分以内で、Powerpoint（以下：PPT）を使用しながら発表し、その後質疑応答を受ける形式で行った。

発表までのおおまかな流れは、表2の通りである。

【表2】発表までの流れ

回	日時	内容
1	7月5日(月)3限	導入 調査発表活動についての説明
2	7月8日(木)2限	準備① 最終目標の設定と道のりの図式化
3	7月12日(月)2限	準備② 調査計画書の作成
4	7月12日(月)3限	準備③ 調査1
5	7月13日(火)1限	準備④ 調査2
6	7月13日(火)2限	準備⑤ 調査3
7	7月14日(水)1限	準備⑥ 調査4
8	7月14日(水)2限	準備⑦ 調査5
9	7月14日(水)3限	準備⑧ 発表資料の作成1(PPTなど)
10	7月15日(木)1限	準備⑨ 発表資料の作成2(PPTなど)
11	7月15日(木)2限	準備⑩ 発表資料の作成3(PPTなど)
12	7月19日(月)2限	準備⑪ 発表原稿作成1(Wordなど)
13	7月19日(月)3限	準備⑫ 発表原稿作成2(Wordなど)
14	7月20日(火)1限	準備⑬ 発表原稿作成3(Wordなど)
15	7月20日(火)2限	準備⑭ 発表原稿の添削・清書1(Wordなど)
16	7月21日(水)1限	準備⑮ 発表原稿の添削・清書2(Wordなど)
17	7月21日(水)2限	準備⑯ 進度の調整と発表の練習1
18	7月21日(水)3限	準備⑰ 進度の調整と発表の練習2
19	7月22日(木)1限	準備⑱ リハーサル
20	7月22日(木)2限	発表・評価

各回の活動の詳細については、下記(1)～(9)の通りである。

#### (1) 1回目：導入

調査発表の目的、概要、発表までの流れを示し、テーマである「私の将来の計画（進路について）」についての説明を行った。その際、学生達が発表資料の内容や発表当日の様子をイメージしやすいように、過去に同じテーマで発表した卒業生の発表録画を視聴させた。

(2) 2回目～3回目：準備①②

各自が将来を意識するため、進路の最終目標を設定し、その理由やそこに至るまでの道のりの図式化を行った。また、何をどのように調べ、どのように発表するかを考え、整理するために調査計画書を作成した。

この時点で、Office365のOneDriveに担当教員と学生が共有できるファイルを作成し、そこに保存した調査計画書、PPT、発表原稿など、作成過程にあっても相互に確認し、いつでも修正ができるようにした。

(3) 4回目～8回目：準備③～⑦

準備②で作成した調査計画書を基に、情報収集を進めた。調査は、実際に大学に行って調べることは不可能な状況であったため、インターネットを使用し、大学のホームページなどから必要な情報を収集することとした。調べる内容は主に「希望する大学（大学院）名」「興味のある学部や科目（研究分野）」「師事したい教員」などで、その他、入学に必要な準備についても併せて調べることにした。

(4) 9回目～11回目：準備⑧～⑩

準備⑦までに調査した内容を基に、情報をPPT上に整理し、発表資料の作成を進めた。構成や内容（特に出典や引用について）は、担当教員が適宜指摘・助言した。

(5) 12回目～14回目：準備⑪～⑬

作成したPPTに合わせた発表原稿の作成を行った。内容や文法の誤りについては、担当教員が適宜指摘・助言した。

(6) 15回目～16回目：準備⑭～⑮

発表原稿を担当教員が最終確認し、完成させた。

(7) 17回目～18回目：準備⑯～⑰

準備が遅れている学生は、さらに発表原稿の作成を進め、準備が終わっている学生は、発表の練習を行った。練習では、主にタイムマネジメントの仕方や発表内容（PPT）に合わせて話す練習を行い、その他にも間の取り方や発音・抑揚に気をつけて話す練習を行った。その際、zoomのブレイクアウトセッション機能を利用した。

(8) 19回目：準備⑱

当日の司会担当を決め、本番同様PPTを使い、原稿を読まずに発表する練習を主に行った。

### (9) 20 回目：発表・評価

校内の教員、職員、学部学生、別科卒業生を招待し、視聴客がいる中で発表を行った。発表時間は最長 20 分で、発表後には質疑応答を行った。発表の様子は、zoom のビデオ機能を使って録画し、評価の対象とした。

本来なら、発表後あまり時間を置かずに、撮影したビデオ映像を見せ、自ら振り返る機会を設けたかったが、スケジュールの都合上、4 ヶ月後の 11 月に録画を視聴させ、振り返りのためのアンケート調査を行った。

### 2-3-2. 発表内容

発表当日は、発表者、教員、視聴客を zoom で繋ぎ、一人の教員が司会進行を担当した。司会進行も学生自身で行うのが理想的ではあるが、zoom 操作のトラブルを避けるため、発表者から次の発表者の紹介のみ学生同士で行った。

以下は、PPT のスライド 1 枚目に書かれた各自のテーマと、発表内容の構成である。

#### 【学習者 1】

テーマ：「将来の計画 my life plan」

構成：

- ①発表の目的：別科卒業後の進路とその理由、そのための努力について
- ②将来の計画：コロナ禍でのジレンマを抱えながら考える進学するための計画について
- ③準備：大学院入試までに必要な準備について
- ④まとめ：目標達成までの計画と抱負について

スライド枚数：21 枚

#### 【学習者 2】

テーマ：「私の進路」

構成：

- ①今後の目標：別科から大学院入学までの道のりについて
- ②行きたい学校と専攻：希望する 4 つの理由について
- ③関連情報の調査：指導を仰ぎたい先生について
- ④大学院卒業後の計画：大学院卒業後の計画について
- ⑤まとめ：目標達成後の計画と抱負について

スライド枚数：16 枚

#### 【学習者 3】

テーマ：「私の将来の計画」

構成：

- ①将来の方向：「日本留学までの過程」とその理由について
- ②進路：希望する大学の魅力について
- ③まとめ：目標達成までの計画と抱負について

スライド枚数：18枚

### 3. 学生へのアンケート

発表後、撮影したビデオ映像を見て、発表を振り返る機会を設け、アンケート調査を行った。この振り返りおよびアンケート調査は、スケジュールの都合上、秋学期中盤の11月（発表から4ヶ月後）に実施し、解答は日本語の他に母語（中国語・ベトナム語）でも良いこととした。

#### 3-1. アンケートの内容

アンケートの内容は表3の通りである。基本的には4択または5択の選択式とし、その選択肢を選んだ理由や情意に関する質問には記述による回答を求めた。自由記述の回答には日本語の他に母語（中国語・ベトナム語）でも良いこととした。3名のうち1名が母語で回答したため、google 翻訳を使って日本語に翻訳し、回答をより正確に理解するためフォローアップインタビューを行った。

【表3】アンケートの質問及び回答の内容

	質問の内容（選択式）	回答の内容（選択式）	自由記述の有無
1	回答者の氏名		×
2	調査発表活動は、日本語の上達に役に立ったと思いますか。	1. ぜんぜんそう思わない 2. すこしそう思う 3. そう思う 4. とてもやくにたった	○
3	調査発表活動は、自分の希望進路先を知るのに役に立ったと思いますか。	1. ぜんぜんそう思わない 2. すこしそう思う 3. そう思う 4. とてもやくにたった	○
4	調査発表活動のスケジュールはどうでしたか。（期間の長さ）	1. ぜんぜんたりなかった（みじかすぎた） 2. もう少し時間がほしかった 3. ちょうどよかった 4. 十分だった 5. 長すぎた	○

5	調査発表活動のスケジュールはどうでしたか。(活動の内容)	1. ぜんぜんよくなかった 2. あまりよくなかった 3. まあまあよかった 4. よかった 5. とてもよかった	○
6	調査発表活動のスケジュールはどうでしたか。(時間の配分)	1. ぜんぜんよくなかった 2. あまりよくなかった 3. まあまあよかった 4. よかった 5. とてもよかった	○
7	調査発表活動は楽しかったですか。	1. ぜんぜん楽しくなかった 2. あまり楽しくなかった 3. 少し楽しかった 4. 楽しかった 5. とても楽しかった	○
8	調査発表活動をしてよかったことは何ですか。	×	○
9	調査発表活動で大変だったことや、困ったことがありましたか。それはなんですか。	×	○
10	先生たちの指導は十分でしたか。	1. ぜんぜん足りなかった。 (もっと指導してほしい) 2. もう少し指導してほしい 3. ちょうどよかった 4. 十分だった 5. 多すぎた	○
11	発表は上手にできたと思いますか。	1. ぜんぜんできなかった 2. あまりできなかった 3. まあまあできた 4. できた 5. とてもよくできた	○
12	発表会での質問によく答えられたと思いますか。	1. ぜんぜん答えられなかった 2. あまり答えられなかった 3. まあまあ答えられた 4. 答えられた 5. よく答えられた	○
13	発表会をすることを知った時、どんな気持ちでしたか。	×	○
14	発表会をする前は、どんな気持ちでしたか。	×	○
15	発表会が終わった時、どんな気持ちでしたか。	×	○

### 3-2. アンケートの調査結果および考察

アンケートには参加した3名全員から回答があった。回答結果の詳細と考察は以下の通りである。

#### (1) スケジュールに関連する質問についての感想 (質問：4、5、6)

調査発表準備におけるスケジュールについて「4.期間の長さ」「5.活動の内容」「6.時間の配分」の項目について質問したところ、「4.期間の長さ」については「ちょうどよかった」が2名、「十分だった」が1名で、「インターネットで資料を探すのに時間が十分あり、知りたい情報についてよく知ることができた」「発表を知ったときはスケジュールは間に合わないと思ったが、先生がいろいろと助けてくれたので問題ないと思った」という回答もあり、準備期間から発表までの時間は十分であったことがわかった。

「5.活動の内容」についての質問については、全員が「よかった」と回答しており、その理由として「順を追って準備を進めることができた」「情報収集しながら、同時に先生に文章の誤りを直してもらえた」と集めた情報を効率的に整理しながら完成形に近づけていくそのプロセスについてのコメントがあった。一方で「調べる内容の情報が多すぎて、どれが正しいのか判断するのが難しかった」と未知のことについて調べたことや、集めた情報を自身判断で取捨選択しながら進めることに戸惑いがあったこともわかった。

また、「6.時間の配分」については、「とてもよかった」が2名、「よかった」が1名で、「目標に向かって毎回違う準備をするのはいいと思う」「情報収集する時間やPPTを作成する時間も十分だった」「始めは自分に意見がなく忙しかったが、後からは意見がたくさん出てきたので大丈夫だった」という回答があった。

このようなことから、スケジュールに関しては、肯定的な意見であったことから、調査開始当初は戸惑いがありつつも、進めていく過程で少しずつ自信をつけ、学生自身が情報を収集し、資料を作成するのに十分な時間と内容であったことがわかった。

## (2) 担当教員の指導についての感想（質問：10）

質問10の担当教員の指導に関する質問に対しては、3名とも「十分だった」と回答しており、自由記述においても「役に立った」「指導を通じて誤りを直せた」「説明は難しいが熱心」「一生懸命に努力」などのポジティブな回答が多く、教員の指導については、満足していたことがわかった。

## (3) 発表について（活動の効果）（質問：2、3、7、8、11）

質問2、3、7、8、11では、主に調査発表活動が学生にとって有益であったかどうかという点について質問した。

まず、「2.活動は日本語の上達に役に立ったと思うか」という点については、2名が「そう思う」、1名が「とても役に立った」と答えており、その理由としては「きちんと日本語を使って調査発表を行ったことで能力が上がった」「口頭能力と作文能力を強化できた」「創造性を養うことができた」「語彙量が増え、話す能力が上がった」などの理由が挙げられ、特にアウトプットに関わる日本語能力の向上を実感していることがわかった。

次に、「3. 活動は自分の希望進路先を知るのに役に立ったと思うか」という質問に関しても、2名が「そう思う」、1名が「とても役に立った」と答えており、活動の内容を通して日本語力の面からも知識の面からも学生にとって有益であったと言える。

また、「7. 活動は楽しかったか」という情意面に関する質問には、2名が「楽しかった」、1名が「とても楽しかった」と回答しており、楽しかったと思う理由には「達成感があった」「新鮮な経験だった」「考えを表現するだけでなく先生と交流できた」とあった。コロナ禍で来日できず、なかなか「生」の日本語に触れる機会のない学生にとっては、活動を通して、母語話者である教員とより深く交流できたことが大変貴重な体験であったことが窺える。

「8. 良かったこと」については、「日本語の練習ができた」「知識が増えた」「自信がついた」などの回答があった。

「11. 発表は上手にできたか」という質問には、2名が「できた」、1名が「まあまあできた」と答えており、「発表の後に私の発表能力が少し向上した」「たくさん先生がいたが、自信があったので、心配しなかった」「練習の時にはできていた発音が本番では緊張してうまくできなかった」という回答があった。

#### (4) 発表について（困難点）

質問9では、「活動で大変だったことや困ったこと」について質問したところ、3名中2名が「困ったことがあった」と答えており、その困った点として「発表する内容を整理（削除）するのが難しかった」「母国でインターネット閲覧制限があり、論文などが確認できなかった」などが挙げられ、母国にしながら調べものをするには限界があることが分かった。また、1名については「PPT作成は苦手だったが、先生が助けてくれた」と前向きに捉えていたことがわかった。

#### (5) 発表について（質疑応答）（質問：12）

質問12で、ゲストからの質問にうまく答えられたかを振り返ってもらったところ、「まあまあ答えられた」が2名で、「答えられた」が1名となった。しかし、自由記述では「質問が聞き取れなかった」「単語がわからず答えられなかった」「緊張して全部伝えられなかった」と答えており、3人とも質疑応答については満足していないことが窺える。担当教員以外の日本人と話す機会が圧倒的に少なく慣れていないことが原因とも考えられるため、この点についていかに指導し、支援するかが今後の課題である。

#### (6) 発表についての気持ちの変化について（質問：13、14、15）

質問13、14、15では、「調査発表をすることについて知らされた時・発表直前・発表後」の学生の気持ちの変化について質問した。学習者1は「緊張した→緊張した→楽し

かった」と答え、学習者2は「とても心配だった→とても緊張した→リラックスした。感謝の気持ち」、学習者3は「楽しみだった→パソコンの調子とネット環境が心配でドキドキした→とても嬉しかった」と答えていることから、学生3名とも緊張感や期待感を持って準備・発表に取り組み、発表後はその達成感を感じていたことがわかったことから、調査発表は、学生にとって大きな自信となったことが窺える。

以上の結果から、活動の内容、流れ、教員の指導については概ね満足していることがわかった。また、この活動の5つの目的のうち「(1) 日本語を介して行う調査と発表までの計画力」については、教員主導となったため、全ての計画を学生自身が完遂できたとは言えないが、教員が示した計画に沿って進める能力は養われたと言える。「(2) 日本語で書かれた資料からの情報収集力および分析力」については、情報収集をする能力は長けていたが、聞き手を意識して情報を整理する能力については課題が残った。「(3) 日本語による発表資料の作成力」については、文体の統一やPPTでの箇条書きなどがうまくできないという問題が浮き彫りとなった。「(4) わかりやすい日本語で伝えるための口頭表現力」については、翻訳で調べた語句の意味をよく理解しないまま使おうとする傾向があり、視聴客には理解が難しい内容もあったが、伝えたい内容を積極的に伝えようとする姿勢が見られた。「(5) 日本語による質問への対応力」については、「質問が聞き取れなかった」「単語がわからず答えられなかった」「緊張して全部伝えられなかった」という回答にあるように、課題が残る結果となったが、その原因としては、制限の多い学習環境の影響が大きいと考えられる。しかし、ハンディがある中でも、視聴客に対して誠意を持って答えようとする姿勢が見られた。

また、担当教員が共有している授業記録からはオンライン指導における問題点として、学生のパソコン操作の指導に想定外の時間が取られたことや、通信環境のトラブルやハプニングへの対応、学生の母国からの日本語文献などの閲覧制限、学生同士のインタラクション不足が挙げられていた。

## 5. おわりに：オンラインによる調査発表活動の意義と課題

今回の調査発表活動では、ディプロマポリシーの「日本の高等教育を受けるために必要な日本語運用能力の習得」と「高等教育機関において主体的に学習を進める能力の習得」という目標を掲げた。この点については、教員が主導した部分もいくつかあり、完全に目的を達成できたとは言いが、学生達なりに主体的に努力し課題を完了することができた。また、アンケートの回答に見られるように、学生達の達成感や満足度は教員側の予想以上であり、そのような意味においてもこの調査発表活動は有意義であったと言えるであろう。

今後の課題としては、対面指導以上に教師間の PPT や原稿内容の指導・添削に関する情報共有を密にすること、学生同士のインタラクションを増やす工夫をすること、教員以外の日本語母語話者との会話に慣れるための指導や支援、また不測の通信障害への対応策も準備し、予め学生達に伝えておくことが特に重要であると言える。

最後に、教科書中心の授業では成績の振るわなかった学生が、情報収集や PPT 資料の作成において優れた能力を発揮し、順調に準備を進めていくなど、これまで気付かなかった能力を発見し、アカデミックレベルの日本語能力を発揮するためには、このようなりテラシーを併せ持つことも重要であることを改めて実感した。

#### <参考文献>

- 飯田洋子・藤澤好恵 (2017) 「初級日本語クラスにおけるプロジェクトワークの実践—実践的な日本語運用能力の育成を目指して—」 神戸国際大学学術研究会 『神戸国際大学紀要』 第 93 号 pp67-82
- 上村和美・内田充美 (2015) 『プラクティカル・プレゼンテーション 改訂版』 くろしお出版  
国際交流基金 (2011,2019) 『中・上級を教える』 ひつじ書房 pp48-51
- 近藤純子 (不明) 「中級学習者を対象にしたプロジェクトワークに必要な手助け—学習者の力を引き出すための指導法—」
- 佐々木 薫・赤木 浩文・安藤 節子・草野 宗子・田口 典子 (2014) 『改訂版トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 中級前期』 スリーエーネットワーク
- 高屋敷 真人 (2014) 「初中級日本語会話クラスにおけるミニスピーチ：プレゼンテーション・プロジェクトの実践について」 『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 24 巻 pp71-90
- 田中 望・斎藤里美 (2013) 『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』 大修館書店 p140
- チー リン (2020) 「初中級クラスにおけるプレゼンテーション活動の試み—口頭運用能力を伸ばすために—」 『国大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』 11 巻 pp123-141
- 中澤 務・森 貴史・本村 康哲 (2015) 『情報と知識の海—現代を航海するための知のナビゲーター』 くろしお出版
- 馬場 真知子・小熊 貞子・本郷 智子・上原 真知子・広田 妙子・越前谷 明子 (2004) 「プレゼンテーションのための諸活動における学習者と教師のインターアクション」 『日本語教育方法研究会誌』 11 巻 2 号 pp30-31
- 福池秋水 (2018) 「初級日本語クラスにおける「自己表現」を促す発表活動の試み」 『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 第 28 巻 pp33-47
- 三浦 香苗・深澤 のぞみ (2006) 『アカデミックプレゼンテーション入門』 ひつじ書房
- 山田陽子 (2012) 「スライド作成と口頭表現技術を学ぶ日本語教育—留学生の「日本語プレゼンテーション授業」から—」 『名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究』 第 17 号 pp169-180